

どんぶ(り)

中野
劇団

どんぶらこ

作・中野 守 (中野劇団)

むかしむかし あるところに

おじいさんと 犬が 住んでいました。

ある日のこと

おじいさんは山へ芝刈りに

犬は川へ洗濯に行きました。

洗濯をしている犬がふと川上を見ると

川上から大きなきびだんごが流れてきました。

犬はそのきびだんごを川から拾い上げ、お爺さんと一緒に食べようと家を持って帰りました。

芝刈りから帰ってきたお爺さんにそのきびだんごを見せると

お爺さんはさっそくそのきびだんごを箒で真つ二つに切りました。

するときびだんごの中からなんと玉のような赤ん坊が出てきました。

お爺さんと犬には子どもがなかったので、たいそう喜びました。

そしてどんぶらここと名づけられたその赤ん坊はすくすくと立派に育ちました。

「お爺さん、犬、私はこれから桃退治に行つて参ります」

どんぶらこがそういうと、そんな危ないことはやめた方がいいと犬が心配そうに言いました。

しかし村の人達が困っているのをこれ以上見てられないと、どんぶらこの決意は固く、お爺さんと犬はどんぶらこを送り出すことにしました。

犬はどんぶらこに巾着袋と「さる」と書かれた幟を持たせました。

どんぶらこは桃ヶ島をめざして歩き始めました。

すると目の前にひとりの鬼が現れました。

「どんぶらこさんどんぶらこさん、お腰につけたキジ、ひとつ私に下さい」
するとどんぶらこは、

「私はこれから桃退治に行くのだが、ついて来るなら、そなたにこのキジをひとつわけてやろう」

「わかりました。きっとこの角で立派に戦ってみせましょう」

そうしてキジを貰った鬼はどんぶらこのお供としてついて行くことになりました。

どんぶらここと鬼が暫く歩いていっていると、今度は目の前にひとりの鬼が現れ

ました。

「どんぶらこさんどんぶらこさん、お腰につけたキジ、ひとつ私に下さい」
するとどんぶらこは、

「私はこれからこの鬼と桃退治に行くのだが、ついて来るならそなたにこのキジをひとつつけてやろう」

「わかりました。きっとこの角で立派に戦ってみせましょう」

そうしてキジを貰った鬼はどんぶらこのお供としてついて行くことになりました。

どんぶらここと鬼と鬼が歩いていると、今度は目の前にひとりの鬼が現れました。

「どんぶらこさんどんぶらこさん、お腰につけたキジ、ひとつ私に下さい」
するとどんぶらこは、

「私はこれからこの鬼と鬼とで桃退治に行くのだが、ついて来るならそなたにこのキジをひとつつけてやろう」

「わかりました。きっとこの角で立派に戦ってみせましょう」

そうしてキジを貰った鬼はどんぶらこのお供としてついて行くことになりました。

こうして鬼と鬼と鬼をお供にしたがえ、どんぶらこは桃ヶ島を目指して歩いて行きました。

どんぶらこは海岸に辿り着きました。

「あの海の向こうに見えるのが桃ヶ島だ」

どんぶらこ達はおばあさんに乗って海を渡り、ついに桃ヶ島へと辿り着きました。

「よし、かかれー」

どんぶらこの合図で鬼と鬼と鬼が一斉に桃に襲いかかります。

そしてどんぶらこも果敢に桃に立ち向かって行きました。

赤い桃やまだ青い桃が次々にどんぶらこの斧で切って落とされていきます。

「うわあ、やめてくれー、降参だあ」

どんぶらここと鬼と鬼と鬼の攻撃にかなわないと思った桃はこれまでの悪事を反省し、村人から奪った日本一をどんぶらこに差し出しました。

こうして日本一を持ち帰ったどんぶらこは、犬と末永く幸せに暮らしましたとさ。